MUTSUMI GROUP

医療法人 むつみホスピタル広報誌

2023.01号

法人理念

“むつみの道”を共に歩み
人生をより豊かなものとし
今を語り合って生きる

第一の道
こころの病を患う人々の
回復への道

私たちを信頼し、こころを開いて話をしてくれる彼らの“回復”のために全力を尽くします。“回復”とは、彼ら自身の物語であり、ボディ・マインド・スピリット・コミュニティなどから創られます。私たちはその一人ひとりの物語に温かく寄り添い、微細な変化に注意をはらいながら、自己決定を促すことで着実に支援していきます。

第二の道
仲むつまじい
組織への道

すべてのスタッフが個人として尊重され、提案や苦情が自由にできる風通しの良さがあり、安全・清潔な職場で安心して仕事に取り組むことができる環境を整えます。そこで私たちは、精神保健サービスを提供する専門職集団としての誇りを持ち、利他的に協力して共に高め合い、それぞれの長所を生かしたチームとなって力を発揮していきます。

第三の道
偏見のない穏やかな
世界への道

あらゆるこころの健康問題から目をそらさず、医療・福祉・公衆衛生などの垣根を越えたサービスの提供を通じて地域に貢献し、偏見のない穏やかな世界の実現をめざしていきます。それは、こころの病を患っても安心して生活を続けることができ、こころの健康増進が人生の豊かさに直結すること、人は宝だということを、すべての人が理解している世界です。

目次

1：理事長６年生

・ 井上 秀之（理事長） ・・2

2：院長就任５年間の振返りと今後の抱負

・ 小谷 泰教（病院長） ・・4

3：2022年の振り返り、2023年の抱負

・小谷雄二 （名誉院長） 郡 利江（副院長） ・・6
・杉野 和孝 （総合企画部） 徳重学（総務部） ・・7
・勝瀬 烈 （精神科医） 井上 和俊（精神科医） ・・8
・高野 尚之 （内科医） 井上 英治（精神科医） ・・9
・小谷 治子 （小児科医） 井下 真利（精神科医） ・・10
・三木田 純也（しらさぎ病棟） 福原 澄子（やまもも病棟） ・・11
・中山 博 （うずしお病棟） 佐藤 恵里（あい病棟） ・・12
・近藤 幸子 （すだち病棟） 森下 範枝（薬剤室） ・・13
・竹岡 里紗 （心理室） 宮田 有佳（リハビリ室） ・・14
・水本 多恵 （地域連携相談室） 山村 千春（栄養管理室） ・・15
・井関 忠 （レントゲン室） 前田 真理子（デイケア） ・・16
・新田 陽子 （経理課） 岸 薫（医事課） ・・17
・横畠 麻実 （ネクスト） 濱田 さくら（ウイスパー） ・・18
・佐坂 有香 （相談支援事業所） 秋山 健太（訪問看護ステーション）・・19
・薮下 李奈 （レストラン） ・・20

また建築を通して、銀行との金利交渉、土や資材、天候についてのゼネコンや県との見解の相違による争いなど、さまざまな修羅場があったが、これらによりトップとしての胆力も少しはついたと自負している。そして、こうした矢継ぎ早の組織改革、安定した財務維持、激務を極めた建て替えは、徳重総務部長の貢献と成長抜きにはなし得なかった。

臨床面では、小谷院長を中心にスタッフ全員が労を厭わず協力し、５年間で病床稼働率91%→96%、新規入院患者数1.3倍、新患数1.2倍となった。また、COVID19に翻弄されたこの2年だが、特に前線で対応する看護スタッフの尽力には言葉にならないものがある。臨床事業では、精神科救急急性期病棟の設置、クロザピン治療の導入、LAIチームの発足、訪問看護ステーションの設立、ハローワークとの障がい者支援協定、障害者就労施設設立、厚労省モデル事業受託（ACTチームとして発展）、相談支援事業の委託、認知症疾患医療センター認定、精神科救急事業常時対応型認定などに取り組んだ。

地域との繋がりにおいては、徳島ヴォルティスと連携した精神障害者スポーツの推進、近隣スポーツ公園のネーミングライツを「むつみパーク蔵本」の愛称で受託、統合失調症を患うスタッフの正規雇用、ピアも含めた講演活動などを行った。

個人としては、日精協医療経済委員・診療報酬通知等に関する検討部会員、県災害医療対策協議会委員、精神科救急医療体制連絡調整委員、県精神保健福祉協会理事・総務委員・スポーツ振興委員、徳精協理事などを務め、精神科救急学会、精神神経学会シンポジウムなどにて法人の取り組みを発表した。

●今後の抱負

現職について最初の取り組みは採用活動だと冒頭に記したが、最初の仕事は辞表の受理だった。その後も続くこの役割によって私は、「スタッフにはやむを得ない事情があり、別れは突然やってくる」と言い聞かせ自分の気持ちに蓋をした。蓋をすることで自分の心の安定を保ち、事業発展のための仕組みづくりに邁進することができた。しかしここ数年、それでよかったのかと自問自答している。最高の病院建築や人材育成制度ができたとしてもそこで働く仲間がいなければ何の意味もなさない。病院作りとは「理念を軸にした仲間作り」だと最近は思うようになった。患者さんにもスタッフにも地域にも、理念を軸にした仲間の輪を広げていきたい。

今年の漢字は「蹴」と書いた。サッカー好きであれば当たり前の選択かとも思うが、カタールで開催されているワールドカップでは素晴らしい試合が続いている。ドーハの悲劇から約30年、日本サッカーは大きく変わったと思う。全てのサッカー関係者の想いと努力が「あの1mm」を、「ロスタイムの戦う姿勢」を生み出した。課題のない組織や人はいない。私も自分の気持ちに被せていた「蓋」を「蹴」っとばし、スタッフとの別れのみならず、どのような場面でも「理事長」としてではなく「人」として向き合える人間を目指して「ゆっくりと前へ」歩んでいきたい。

※井上秀之：2022年の漢字＝「蹴」
カタールワールドカップでの素晴らしい熱戦と
日本代表躍進の感動、今後の日本サッカーの発展を期して
コロナに関する過剰な行動制限や偏見に「蹴」りをつけて
日常を取り戻す！との思いも込めて

理事長6年生

理事長　井上 秀之

●理事長就任後を振り返って

早いもので、38歳で現職に就いてから5年が過ぎ、小学生であれば残り3ヶ月で卒業を控える季節となった。この間、法人理念である「むつみの道」の実現と「精神科医療のプレゼンス向上」を目指してがむしゃらに歩んできた。私が最初に取り組んだのは「折り紙プロジェクト」と名付けた採用活動だった。誰も見向きしない採用ブースからのスタートだったが、毎月ハローワークに通いながら各種学校など地域の関連施設との関係を深めてきた。続けて、ANEgo制度（メンター制度）、あすなろ委員会（教育委員会）の設置、初期を中心とする研修制度の充実などによる育成強化を図り、えるぼし企業やユースエール企業、はぐくみ企業などにも認定された。また、郡副院長・兼看護部長、杉野総合企画部部長が新たな仲間として加わり、それぞれ看護部を、管理職を中心に人材育成に大きく貢献してくれた。新卒採用が当たり前となり、5年でスタッフは50％以上入れ替わり、新卒だった彼らの中から新たなリーダーが生まれようとしている現状には、込み上げてくるものがある。

組織改革においては、念願だった週休2日制度と401kを導入し、むつみwayBOOK（業務基準書）、V2MOM（業務行動計画）、むつみアライアンス（クライアントパス）などを作成し、毎朝の回診を開始して法人の方向性の浸透を図り、アップデートミーティング（部署長会議）、運営委員会などを毎週行うことで管理職の強化に努め、会計ソフトfreee、勤怠管理King of time、患者呼び出しシステムDr. Qube 、訪看管理システムワイズマン、FMC (KDDI)、Google Workspace、などを導入して業務を効率化した。

財務においては、過去5年において医業収益が1.3倍、経常利益1.4倍と本業が順調であり、貸借対照表では、自己資本比率(65.3%, BM30%)、流動比率(1120.5%, BM200%)が高く、固定長期適合率（65.8%, BM100%）の割合が低い理想型であり、キャッシュフロー計算書においても営業CFの中に、投資CF、財務CFが収まりバランス型を維持している。また、持続可能な法人運営のため、出資持分、ガバナンス、法人税遡及請求などのリスクを鑑み、認定医療法人に移行した。

病院建て替えについては、約30社からの提案、5社でのプロポーザルを経て日建設計をパートナーとし、患者さん・スタッフ・地域の「間」と「つながり」の再構築を目指した設計とした。その結果「多職種協働」「地域にある精神科病院」を体現した新病院「むつみホスピタル」が完成し、多くの出版社から取材を受け、多数の見学者が訪れるようになった。

「交差点」　河野ルル　2021
精神科医療とは何かを表現

院長就任５年間の振返りと今後の抱負

病院長　小谷 泰教

●院長就任５年間を振り返って

2017年4月に院長という大役を拝命して早いもので5年9ヶ月が経過致しました。
最初は、院長として何を行なえばよいのか右も左も分からない状態でしたが、1つ重視したのが「和」を大切にするということです。
「和」とはチームワークのことであり、皆さんご存知のとおり医療組織として一番重要な要素です。
経営層と現場スタッフ間が隔たりなく同じ方向に進んで行けるように「コミュニケーション」「情報共有」を大切にしてきました。

徳島県の精神医療をけん引する病院を目指し、この5年間は理事長を中心に様々な取り組みを行って参りました。まずは法人理念を見直しました。また、より地域に開かれた病院にするため設計・建築会議を繰り返し、2019年7月には新棟が竣工されました。

この際、法人名・病院名も「むつみホスピタル」とし、精神科急性期治療病棟を精神科救急入院料病棟（現在は精神科救急急性期医療入院料病棟）に変更、44床から60床に増床して急性期患者の受け入れ体制の強化を図りました。更に、訪問看護ステーション及び認知症疾患医療センターも開設しております。一方、職員に対しては就業時間の変更・週休2日制の導入などのさまざまな改革を行いました。

苦労した点としては、何と言っても2020年1月以降より世界中に感染が拡大し、現在も続いている新型コロナウイルスとの闘いです。
当院においても、感染予防措置、体制整備、また感染者発生時の対応手順など、患者さんとスタッフを守るためにさまざまな対策を講じて参りました。患者さんやご家族には面会や外出・外泊、スタッフには会食や移動の制限等をお願いすることで、負担や不自由を強いてきました。

患者さん、関係機関にはもちろんですが、この変革の時期、苦難の時期を共に歩んでくれたスタッフの皆さんには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。
引き続きよろしくお願い致します。

※2022年もソフトボール練習に励みました。
早くコロナを終結させ、試合がしたいですね！

●今後の抱負

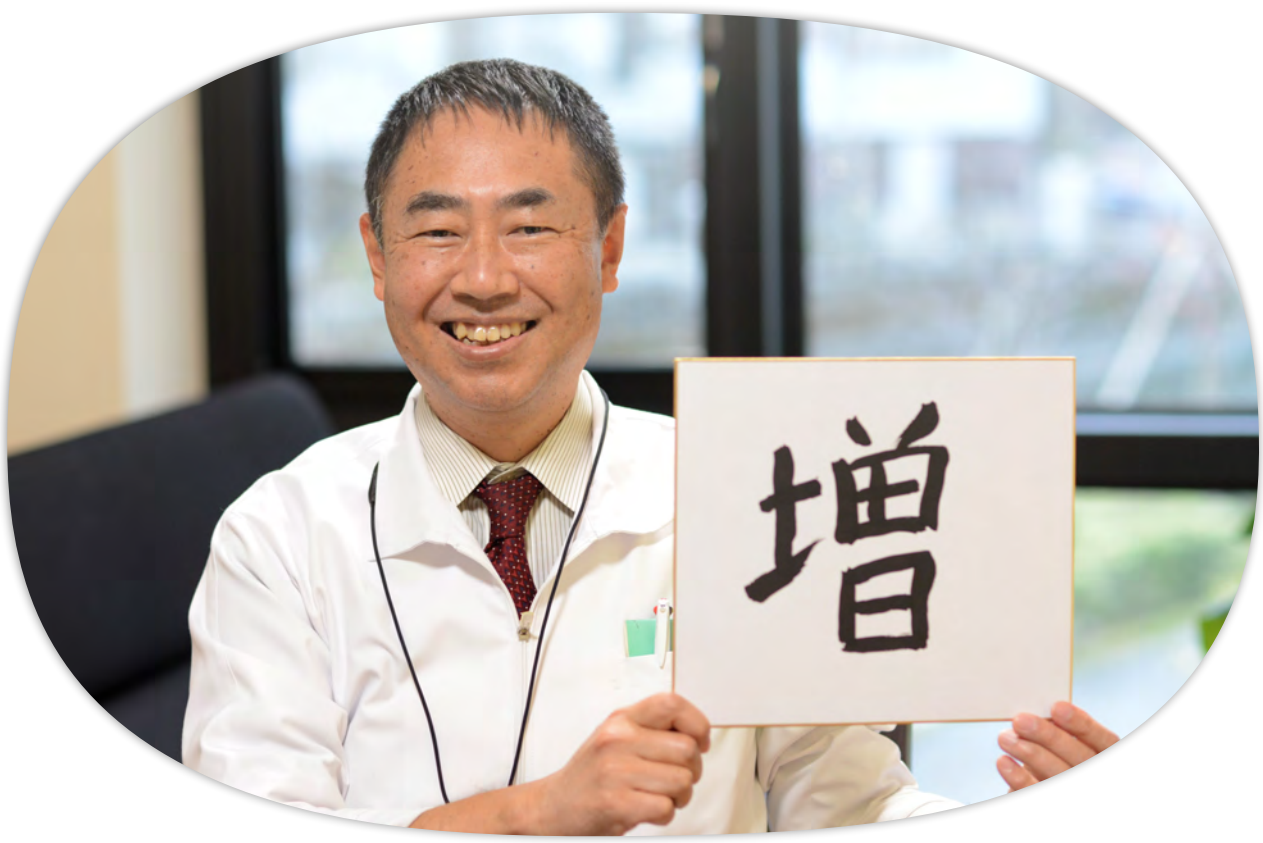
今後は救急医療、在宅医療の更なる充実、また小児から高齢者まで幅広い年代の利用者に一層貢献できる医療機関を目指すため、医師の増員も不可欠ですが、同時に各スタッフのスキル向上が望まれます。そのため、今まで以上に教育や研修の機会を多く提供すること、そして中堅・若手世代には新しい取り組みについて、どんどんリーダーシップを発揮してもらい発案、実行する機会を積極的に提供していきたいと考えています。

また、今後5年の間には2期工事も始めていくことになるでしょう。今より更に地域に寄り添った身近な病院になれるよう、基本構想もまとめて、設計、施工と進められるよう取り組んで参ります。

コロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻、元首相が銃撃を受けて殺害される事件が起きるなど、5年前には想像すらできなかった事態になっております。そのような予測不能で先行き不透明な現代社会において、我々は激変に耐え、我が国の精神医療の更なる発展ならびに地域に一層貢献できる組織を目指したいと思います。その実現のためには、法人理念である「むつみの道」（下記3つの道）の実践こそが必要と考えており、これからもスタッフ全員で歩んでいく所存です。

【むつみの道】
・こころの病を患う人々の回復への道
・仲むつまじい組織への道
・偏見のない穏やかな世界への道

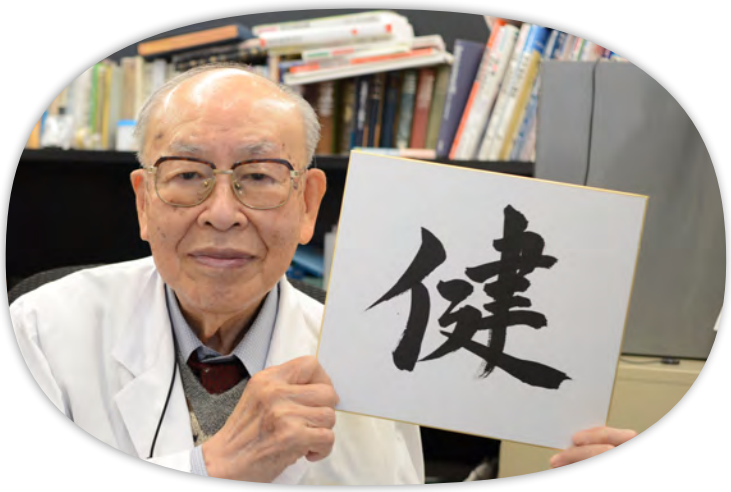
引き続き、皆さまからのご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。
今後とも変わり続けるむつみホスピタルをご期待下さい。



※小谷泰教：2022年の漢字＝「増」
今年は、病院全体の入院患者数・病床利用率増、
個人的にも受持ち患者（入院・外来）増等で
忙しさ増の1年でした。
また、ストレスも増して自宅晩酌が増え
体重も増加した1年でした（笑）。

名誉院長

小谷 雄二



●2022年を振り返って

つたない精神科医ですが、心の悩みのある人々の良き相談員となるように努めてきました。
今年の一文字は、『健』「今年も健やかに過ごせた。来年も元気に。」という意味を込めています。
健康の秘訣とまではいきませんが、普段の生活では、昼は病院の給食を食べて、夕食は野菜サラダや魚・肉などの動物性タンパク質を中心に摂っています。朝や昼はエネルギーがいるのでしっかり食べるよう意識しています。

※小谷雄二：2022年の漢字＝「健」

●2023年の抱負

余生を有意義に楽しく過ごしていきたいです。
趣味は読書や音楽鑑賞、旅行です。特に音楽のクラッシックが好きで、ここ数年は部屋でクラッシックを楽しんでいます。今年は、生演奏が聴きたいですね。迫力が違いますから・・。
この病院に勤めて半世紀以上が経ちます。若い人達にどんどん活躍してほしいと思います。その為には、たくさん本を読んだり、色々なことを体験してほしいと思っています。これからの人生に役立つと思いますので・・。若い人材が成長して、この病院がますます発展することを願っています。

副院長兼看護部長

郡 利江

●2022年を振り返って

看護部は、看護実践能力の向上のために、記録の充実に取り組みました。「患者さんに寄り添い観察しアセスメント、実践した看護を記録する」目標達成のために、MSE研修を入職3～5年目の看護師対象に実施し、評価指標をアセスメント率にしました。年当初、20%台だったアセスメント率は、10月に全ての病棟が目標の80%を超えました。各病棟も、患者さん目線の様々な取り組みを行い成果を上げています。「やればできる」と看護部の底力を実感することができた一年でした。

※郡利江：2022年の漢字＝「力」

●2023年の抱負

2023年はウサギ年、飛躍の年です。MSE研修を受講した看護師が講師となり研修会を開催し、アセスメント力の強化を図ります。観察と適切なアセスメントにより、患者さんのストレングスを活かした看護の実践へと結びつけたいと考えます。また、多職種を巻き込みながら、患者さん一人ひとりが、その人らしい生活ができるように支援し「ときどき入院、ほぼ在宅」の実現を目指します。スタッフの力を信じて一緒に楽しく看護し、看護の専門職として共に成長したいと思います。

総合企画部

部長：杉野 和孝

●2022年を振り返って

2022年は「守り」に徹した一年でした。定年などで長年に当院を支えてくれた職員が退職し、それに伴い多少の混乱もありましたが、彼らが当院に蒔いてくれた若い芽は着実に根付き新しい力として芽吹いてくれています。その若い芽を守り育てていく事に少しは役に立てたかと思います。また新型コロナ感染症の拡大から患者さんや病院機能を守ってくれた職員の頑張りには現場で汗を流す職員はもちろん、それを陰から支える職員に尊敬をこめて「守」を2022年の漢字としました。

※杉野和孝：2022年の漢字＝「守」

●2023年の抱負

2023年は新しい仲間を迎え、当院の理念を起源とする事業計画をよりパワフルに推進できる一年にしていきます。そのために今まで以上に地域に活かされる病院を目指し「むつみフェス」の開催や多彩な教育機関や関連病院さんとの連帯、その基礎となる関係性をより密接にし、患者さんや地域に住む方々、職員が楽しくなる様な仕掛けをしていきます。２期工事が具体的に動き出し理念を具現化する建物になるよう財務はもちろん推進力となる人財育成と採用にも全力を注ぎます。

総務部

部長：徳重 学

●2022年を振り返って

6月から導入した新人事評価制度では、人生のステージに応じた可変的な働き方、年功序列から役割・責任に応じた給与体系への変換など将来に向けた仕組みを組み入れることが出来ました。今後はこの制度を活用し職員の成長を促進できればと考えています。また2022年は公私ともに自分を律し患者さんの安全を守って下さったスタッフに感謝する一年となりました。

※徳重学：2022年の漢字＝「変」

●2023年の抱負

2023年は、22年の診療報酬改定により精神科救急急性期治療病棟の充実のために義務付けられた各種の実績づくりに注力するともに、他の医療機関や支援団体の皆さんと協力して地域での生活支援に注力する一年にしたいと考えています。加えて、これまでコロナで行うことができなかった地域との交流や勉強会などを積極的に開催し、精神科疾患への理解を深める場を提供することで、当院の理念である「偏見のない穏やかな世界への道」を体現する一年にしたいと考えています。

医局

精神科医：勝瀬 烈

●2022年を振り返って

2022年一年を振り返り、漢字一文字で表現するなら、80歳の誕生日を迎えた「八」です。年齢を重ねて80歳になりましたが、今までと変わりなく過ごすことができました。病院診療の傍ら、県の要望を受けての自殺防止の相談業務（アプローチ会）もずっと継続しており、今年で15年を迎えることが出来ました。県からの要望を受けながら、新聞掲載やLINEを活用した相談などいろいろな方向から啓発やアプローチをしており、2022年は自殺者数も非常に少なく相談業務の成果を出すことができたのかなと感じています。

※勝瀬烈：2022年の漢字＝「八」

●2023年の抱負

2023年の抱負は、むつみがホスピタルが徳島市内の基幹病院として活躍するのを期待すると共に、アプローチ会では相談業務の規模拡大を考えています。特に男性スタッフによる相談業務が全国にも少ない為、その立ち上げや、相談員のメンタルヘルスケアには力を入れたいと考えています。15年続けて分かったのは、自殺防止に一番大切なのは「社会に認められること」。人と話し「ここにおる場所がある」というのが大切で、それがモチベーションにも繋がります。そういう精神療法を発信したいです。

医局

精神科医：井上 和俊

●2022年を振り返って

喜寿を過ぎ；①プライベートでは、サーフ＆ターフが復活した。レントゲン室の北村サーファーのお誘いから始まり、今年数回サーフボードを持って海水浴に行けたこと。また出直しゴルフも再開。100回の努力も殆ど報われずとも、挑戦し続けてしまう面白さに今夢中になれていることが、とても楽しい。
②私のライフワーク「精神療法を究めつつ心身を癒し続けること」を追い続けているが、4年前から学び始めたOADへの理解が少しずつ深まり臨床応用が出来つつあることは喜ばしい。

※井上和俊：2022年の漢字＝「究」

●2023年の抱負

①について、海水浴は10回以上行く事。ゴルフはＡ級入り（ハンディ12以下）になること。
②について、OAD（オープン・アウェアネス・ダイアローグ）をさらに深めつつ、学習会を開き、後継者や学びたい仲間を少しでも増やすこと。また、45年の臨床経験で学んできた一精神科医の立場から、気づいたことを積極的に発信し、全スタッフの質を高め病院の更なる発展に寄与したい。

医局

内科医：高野 尚之

●2022年を振り返って

2022年の11月でついに90歳の大台に乗りました。また本院に最初にお世話になってから早や65年になります。大学で勤めたころは、専ら研究の毎日でした。十数種類の医学雑誌を取っていましたが、忙しさのため殆ど目を通していなかったように思います。現在はずっと数も減っていますので、なんとか読破できています。
本院の皆さんは、日頃より大変よく勉強に研究に励んでおられるのがよくわかり尊敬しております。

※高野尚之：2022年の漢字＝「翔」

●2023年の抱負

一応人並みに健康について考えています。食事の習慣としては、朝食はごく軽く済ませています。昼食はバランスのとれた病院食を頂いています。夕食はその時の嗜好に沿って、出来るだけ多種類の食材を摂るように努めております。
運動については、若いときでも無理は避けた方がよろしい。年取ってから後遺症として問題になる可能性も否定できません。高齢になれば軽い運動を継続することが大切と考えています。

医局

精神科医：井上 英治

●2022年を振り返って

2022年も新型コロナウイルスに振り回された1年でした。4月からは常勤医師が1名少なくなり入院患者さんの入れ替わりが早く忙しい1年だったと思います。
そんな中でも新しいことに色々チャレンジできた1年でした。診療面ではギャンブル障害の研修を受けてきて、ギャンブル障害の勉強会を月に1回行うことで来年度から開始するギャンブル障害の集団療法の準備をしているところです。

※井上英治：2022年の漢字＝「挑」

●2023年の抱負

新型コロナウイルスの収束はなかなか難しいと思うので引き続き新型コロナウイルスを病院に持ち込まないことを心がけていきたいと思います。
ギャンブル障害の集団療法を開始していき、そのほかにも色々新しいことにチャレンジしていこうと思います。むつみホスピタルの発展に微力でも貢献できるように頑張っていきたいと思います。

医局

小児科医：小谷 治子

●2022年を振り返って

大学卒業以来、長年小児科医として子どもの成長、発達に携わってきた私にとっては、精神科病棟での仕事は初めての経験であり、それはまるで異言語文化の中で生活をしているような感覚でした。両者の常識の違いに戸惑居ながらも、たくさんのスタッフに助けられながらなんとかこの１年を終えることができました。一方で、小児科医は子どものみでなく、子どもを取り巻く家族や教育・福祉機関等への対応を必要とされるため、これまでの経験が役に立つ場面も多くあったと感じています。

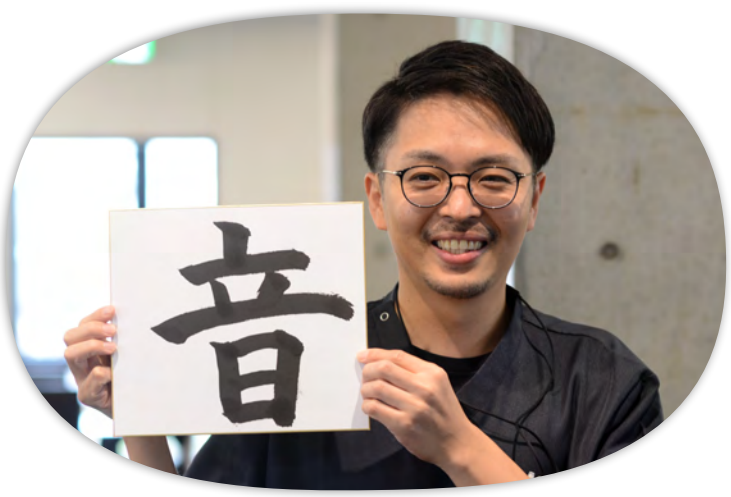
※小谷治子：2022年の漢字＝「未」

●2023年の抱負

精神科医療を学びつつ、小児科医として子どもの発達に関わる仕事を続けていくつもりです。今までは目先の問題のみを考えがちでしたが、大人には必ず子ども時代があったことをふまえ、これからは俯瞰的に子どもの将来を見据えた支援の方法も一緒に考えていくことができればと思っています。小児科医としてできることは限られているため、今以上に他職種の人たちと協働しながら、子どもの発達や子育てについて気軽に相談できる場所を提供できるようになりたいと考えています。

医局

精神科医：井下 真利



●2022年を振り返って

様々な困難に直面した１年でした。悩み自分を責めることもありましたが、周囲の人達に助けられて無事に１年を終えることができました。感謝しかありません。2022年受けた恩をお返しできるように、助け合いの精神を大切にしていきます。私生活では、運動と芸術のすばらしさを再認識しました。2022年の漢字は「音」。音楽や声には不思議な力があります。活気、癒し、鼓舞。芸術には昇華作用があり、私も何度も救われ、勇気づけられました。来年度、治療に生かせれば、と考えています。

※井下真利：2022年の漢字＝「音」

●2023年の抱負

患者さん、職員さんから気さくに話かけてもらえるように愛嬌力を高めることが目標です。患者さんの症状を改善するためには、私を含め治療に関わるスタッフ全員が心身ともに健康であり、それぞれの専門分野を生かし、協力しあうことが必要です。そのためには、毎日を丁寧に過ごし、人に対して誠実であることを心がけたいです。芸術とスポーツを愛する気持ちを持ち続け、2023年こそは徳島ヴォルティスのJ1昇格を願って締めくくりたいと思います。

しらさぎ病棟 精神科救急病棟 スーパー救急

師長：三木田 純也

●2022年を振り返って

2022年は、新型コロナ感染症防止対策を行いながら、救急病棟として毎日の入院患者さんのベットコントロールに追われた一年だったかと思います。幸いにも当病棟では、コロナ感染症患者を出さずに今日に至っています。感染者を出さず、目標の入院患者数を昨年よりも増加することが出来ました。この事は、スタッフが団結し感染対策を行いながら目標達成に向かって尽力した結果だと思います。今後も感染対策を行いながら、より良い入院環境を整えて行きます。

※三木田純也：2022年の漢字＝「結」

●2023年の抱負

2023年も新型コロナウイルス感染症防止対策を行いながら、救急病棟として、「24時間365日、入院を断らない」をモットーに入院をお受けして参ります。また、急性期症状の看護を行いつつ、１日でも長く地域で生活して頂けるように、服薬自己管理や生活していく中での必要な訓練を訪問看護スタッフと連携し、その人の人生がより豊かなものにして行けるようサポートして行きます。

やまもも病棟 精神科療養病棟 女性閉鎖

師長：福原 澄子

●2022年を振り返って

患者さんのため、何ができるかと問い続けるやまもも病棟。2021年はコロナ禍の下、患者さんのストレス発散、体力維持向上のため全員の散歩を実施。2022年は腸活に取り組んでいる。ごぼう茶やファイバー入りのおやつの提供、さらに腸活体操を実施中。結果、患者さんの腸内環境の改善が見られ、下剤などの服用頻度が激減している。また腸活体操は「ウエストのくびれができた」と女性ならではの声も。スタッフ全員、患者ファーストの視点で看護に取り組んでいる。

※福原澄子：2022年の漢字＝「絆」

●2023年の抱負

終わりの見えないコロナウィルスとの闘い。患者さんのストレスは計り知れない。2023年は昨年に引き続き散歩の実施、腸活運動を行い患者さんの負担やストレスの軽減に努めていく。更に本年は患者さんのセルフケアの維持向上をめざしたい。衣類の着脱、口腔ケアなど自分で出来ることを増やしていく。「自分のことは自分で」といった成功体験を得ることで、患者さんの自己肯定感に繋げたい。2023年もスタッフ全員が患者ファーストの視点で、患者さんに寄り添っていきます。

うずしお病棟 精神科療養病棟 男性閉鎖

師長：中山 博

●2022年を振り返って

2022年も新型コロナウイルス感染症の対応に追われた一年で、うずしお病棟では感染対策に心がけ、感染拡大には至りませんでした。これからの季節性インフルエンザの流行にも備え、気を引き締めていこうと思います。また昨年は転倒・暴力が多かったため今年は転倒・暴力防止に力を入れ、発生時期や時間帯の把握、注意喚起や対策を行い、転倒・暴力は減少傾向でスタッフの努力が功を奏していると実感しています。引き続き安全・安心のできる病棟運営を行っていきます。

※中山博：2022年の漢字＝「備」

●2023年の抱負

2023年は患者さんの自宅・施設への退院促進や患者さんのセルフケア向上に注力していきたいと考えています。
うずしお病棟では60歳以上の様々な疾患を持っている方で、病状が安定されていてもコロナの影響で退院促進に遅延が生じ、長期入院となっている方が多数います。また長期入院によるADL・IADLの低下してしまった方もいるのでセルフケア能力の向上を目的とした服薬の自己管理や洗濯・衣類の管理など、患者さんの状況に応じた支援を行っていきます。

あい病棟 精神科療養病棟 身体合併症

師長：佐藤 恵里

●2022年を振り返って

スタッフの結束力はどこにも負けないあい病棟。年初に掲げたSOAP能力の向上やstand　upの向上等の目標に向け、話し合いを繰り返しながら、目標達成に近づけるべく日々努力しています。そんな中、夏にはコロナとの戦いもありました。主任を中心に猛暑に抗いながら、病院や他部署からの温かい支援を受けつつ、これ以上は増やすものかと、皆の強い思いから感染拡大予防の徹底に努め、その結果5人に食い止める事ができました。大変な時に頑張って戦ってくれたスタッフに感謝です。

※佐藤恵里：2022年の漢字＝「戦」

●2023年の抱負

こんな時代だからこそ、本来の「睦」という意味を理解し、患者さんと共に学び支え合うことが大切。そこから一歩でも前進していくために、昨年以上に愛と結束力を深め、スタッフ全員が共通意識を持ち、患者さんのADLの向上と離床促進に向け、取り組んでいきたいと思います。意見の食い違いなどもありますが、皆で話し合い、工夫し解決していきましょう。貴重な若いエネルギーとベテランの底力が融合すれば、さらにさらに素敵な何かが生まれるに違いないと期待しています。

すだち病棟 精神科療養病棟 男女開放

師長：近藤 幸子

●2022年を振り返って

すだち病棟は慢性期の開放病棟です。開放病棟であり、社会に一番近い病棟でもあるので、退院支援に積極的に取り組んでいます。退院に向けての取り組みとして、退院後の生活が具体的にイメージできるようなプログラムや、患者さん主体のお薬ミーティングを多職種と協働し取り組んでいます。長期入院患者さんの退院支援は、直ぐに結果に繋がらず無力感を感じることもありますが、スタッフが諦めない信念をもって働きかけることの大切さを実感しました。

※近藤幸子：2022年の漢字＝「繋」

●2023年の抱負

2022年は全患者さん対象にストレングスマッピングシートを活用し退院支援を試みましたが、効果的な実用ができませんでした。しかし、患者さんとスタッフの効果的な情報共有のツールであり、患者さん自身が退院に向けて多くのストレングスを持っていることに気づくよい方法だと感じました。そこで、2023年は多職種にストレングスモデルについての再理解を促し、退院支援の場において多職種で情報共有し、患者さんの夢の実現に向けてスタッフ一同支援して参ります。

薬剤室

室長：森下 範枝

●2022年を振り返って

2022年はDAI-10を行い、内服を不満に感じている患者さんにより関われるよう取り組みを開始しました。問題点を抽出し患者さんと関わることが出来るメリットを感じながらも十分な関わりができたといえるところまで運用できなかったことに悔しさが残ります。また、2022年は遂に薬剤室内でコロナ感染者がでてしまいました。業務はひっ迫しましたが、他部署の皆様からの支援のお陰で無事に乗り切ることができ、改めて当院の他職種のつながりの良さを実感する年になりました。

※森下範枝：2022年の漢字＝「耐」

●2023年の抱負

2023年も2022年開始したDAI-10を継続し、患者さんの服薬への意識をあげれるよう、関わりを強化していきたいと思います。また、その中で患者さんの服薬継続に向けて、LAI導入や服薬方法の提案などを行い、患者さんがより良い生活を送れるよう、支援していきたいです。そのための一つとして、入院患者さんだけにとどまらず、デイケアでの薬の飲み方の講義を実施し、退院後の支援が出来るようにしていきたいと考えています。

心理室

室長：竹岡 里紗

●2022年を振り返って

2022年は「部署としての力をつけよう」と意識した1年でした。個々での業務が多い部署だからこそ、それぞれの臨床について共有・検討し、意見交換する時間を多く持つ仕組みを作りました。個々人で知識や伝える力をつける必要性に迫られたり、うまくいっていない部分に意見をもらうことは時に苦痛を伴う作業ではありましたが、互いに切磋琢磨できたと感じています。また、心理士としてそれぞれが大切にしている価値や支援のあり方を垣間見ることができる機会となりました。

※竹岡里紗：2022年の漢字＝「鍛」

●2023年の抱負

既存のものに加え、新しい業務や取り組みが次々に始まろうとしています。児童から大人まで幅広くはありますが、臆することなく積極的に取り組んでまいります。スタッフには和気あいあいとした雰囲気や安心して相談できる場、しんどい時には弱音を言える場を保障し、その中で個々の力、部署の力を着実に伸ばしていければと思っています。むつみホスピタルの心理士として、必要な所に必要な支援をしっかりとお届けできるよう本年も尽力する所存です。

リハビリテーション室

室長：宮田 有佳

●2022年を振り返って

リハ室は４月に新しい仲間が増え12名の部署になりました。明るくユニークなスタッフばかりで、賑やかな日々を過ごせたように思います。
今年は患者さんの希望や価値を把握し、必要性の高いリハビリテーションを提供することを大きな目標に掲げました。個人と向き合いながらリハビリを提供する中で、目立たない支援になることが多いです。ただそのような細かな支援こそ、患者さんにとって大切な生活の一部や考えなのだと気づくことが出来た１年でした。

※宮田有佳：2022年の漢字＝「増」

●2023年の抱負

2023年はチャレンジ精神旺盛に新たな取り組みを行っていきたいと思っています。
１点目は生活において困りごとがあるお子さんのリハビリを開始する予定で、自己研鑽を積みながら実践できればと思っています。２点目は連続したリハビリを患者さんが受けれるように地域との関わりを深めていければと考えています。また昨年同様に、多くの患者さんに細やかで必要性の高いリハビリの提供ができるよう努めていきます。賑やかに、楽しく、一生懸命業務に励みたいと思います。

地域連携・相談室

室長：水本 多恵

●2022年を振り返って

2022年はアセスメントが標準化することを目標にあげて取り組みました。週1回の勉強会は、個々の支援に対する価値観を知る機会となり、自分の視野も広がり、一緒に働く仲間同志の理解が深まったと感じています。また、部署内スタッフとの対話を大切にしたいと思い、定期的な面談を行い状況や思いを共有する時間を作りました。向き合い続けたことで、1人1人が真摯に患者さんと向き合い業務に取り組む姿勢を知ることができました。チームとなり取り組むことが出来た1年でした。

※水本多恵：2022年の漢字＝「向」

●2023年の抱負

2023年は、スーパーバイズを年1回は受けることが出来る環境を作り、実施したいと考えています。多くの患者さんと出会う仕事であり、大切なことを患者さんから常に教えていただいています。スーパーバイズを受けることで、その時感じた思いをそのままにせず、振り返る機会を作り、成長したい。自らが何をどう考え、その支援をしたのか、言語化することで、自分の支援や価値観について向き合う時間を持ち、ソーシャルワーカーとしての質を向上したいと考えています。

栄養管理室

室長：山村 千春

●2022年を振り返って

『ええ料理しましょう！』の掛け声で始まった「かま田」とのコラボ企画。2022年で1番大きなイベントでした。開院記念式典のお祝い膳として考案され、前回よりレベルアップ！というハードルの高いもの。果たしてみんなついてきてくれるか。。。と私の心配をよそにスタッフはやる気満々。無事成功！楽しく取り組め、部署として成長できたコラボでした。年間を通して調理スタッフも色々な事にチャレンジ！2022年は挑戦とレベルアップの1年でした。

※山村千春：2022年の漢字＝「挑」

●2023年の抱負

たくさんの『いいね！』がもらえる栄養管理室が目標です！『ここの食事おいしくていいね！』『イベント食が充実してていいね！』『栄養指導のアドバイスがいいね！』『調理スタッフの腕がいいね！』『チームワークがいいね！』『コストカットへの努力がいいね！』など。昨年に引き続き、チャレンジ精神を忘れず、部署としてレベルアップを図ります。《イベント食のさらなる充実》《QOL向上のための栄養指導》を2本柱に『2023年の栄養管理室いいね！』を目指します！

レントゲン室

室長：井関 忠

●2022年を振り返って

新棟が建築されてからはや3年が経ちましたが、導入されたFPD機器の操作方法、撮影条件も変化するばかりで、メーカーSEに教えを乞い未だ作業に四苦八苦している一年でした。
2022年もコロナウィルス感染症が猛威を振るい、猛暑の中で防護服をつけながらレントゲン撮影なども行いましたが、職員が誰一人として不満を言わず一生懸命に患者さんのために一丸と乗り越えられたことはとてもうれしく、誇らしい出来事でした。

※井関忠：2022年の漢字＝「無」

●2023年の抱負

今年は既存のCT装置が更新のタイミングを迎えるため、機種選定に着手したいと考えています。どのような装置になっても今より利便性が高く、診断結果を通じて患者さんに寄与できると確信していますので、十分に使いこなせるよう研鑽してきたいと考えています。
プライベートでは、以前に妻が大病を患った際に、おかゆすら作れず、退院日当日に食事を作ってもらうありさまでしたので、追い出される前に、簡単な料理から学び、かみさん孝行をしたいと考えています。

デイケア

室長：前田 真理子

●2022年を振り返って

元気でエネルギー溢れるスタッフが異動してきて、メンバーさんの活動も活性化し、レクリエーションや運動プログラムが今まで以上に盛り上がりを見せました。心の病を抱えながらも地域で生活をする方々の日中活動の場として、また社会復帰へのワンステップの場として、困った時に相談できる場所として、一人ひとりのニーズにお応えできるように努めて参りました。メンバーさんと支援者が共同創造し、より良い治療を求めて、むつみの道をゆっくりと前へ進んでいけた１年だったと思います。

※前田真理子：2022年の漢字＝「新」

●2023年の抱負

2022年以上に、スタッフ個々のスキルアップを目指し、自己研鑽に努めて参りたいと思います。私たち医療職は、患者さんに寄り添い、心を癒し、必要な情報を提供し、地域で安心して暮らしていくことができるように、サービスを提供しなくてはなりません。そのために、専門的な知識・技能を身につけ、経験を重ね、専門職として実力を身につける必要があります。情熱と向上心を忘れずに、貪欲に自己研鑽に努め、仲間と切磋琢磨してお互いを高め合っていきたいと思います。

経理課

主任：新田 陽子

●2022年を振り返って

2022年の経理課は、2021年より継続してきたIT化のブラッシュアップと会計業務の迅速化を重視した業務を行ってまいりました。さらに小口現金管理のさらなる細分化に対応するとともに、インターネットサービスを利用した業務の省力化への取り組みを始めたところです。その結果、運営委員会に経営検討資料として報告することが出来るようになりました。また人事制度を踏まえた給与変更に関しましても滞ることなく対応できました。

※新田陽子：2022年の漢字＝「続」

●2023年の抱負

2023年の経理課はさらなるIT化を目指します。人事労務や給与関係の電子化です。経理課だけではなく職員全体を巻き込んだIT化に取り組みたいと考えています。
会計業務につきましては顧問会計事務所との連絡を密に行うことで、知識や能力の向上を図りたい思います。各種法令変更についてもクラウドサービスを利用し省力化に努めます。
2023年の経理課をご注目ください。

医事課

主任：岸 薫

●2022年を振り返って

猛威を振るうコロナウイルス。それにより医事課史上初めてと思われる、レセプト請求提出の危機に見舞われる事となりました。自分たちがどんなに気を付けていても、それは周りから襲ってきました。幸い2021年から医事課も人が増えていたことで、辛くも難を逃れることが出来ました。しかし、初めてのコロナ関係請求・初めての少人数での請求等、初めてづくしで焦りと苦労をしたことが思い出されます。そして、団結力と物事の共有をすることの大切さを改めて感じました。

※岸薫：2022年の漢字＝「初」

●2023年の抱負

医事課の事業計画の中にマニュアル作成と他院との繋がりを持とう！という目標があります。マニュアル作成は毎年徐々に進めて来ていましたが、突然の長期休みが発生すると仕事に支障を来しますので早く進めたいことの一つです。そしてもう一つ、他院の医事課の方との交流を持ちたい！コロナ禍で他院へ赴く事が難しいですが、請求していると解釈に難しいことも少なからずあります。そんな折、他院に親しい人がいて、請求の仕方など相談し合えるそんな関係の方が欲しいと思います。

就労継続支援B型事業所ネクスト

横畠 麻実

●2022年を振り返って

ネクストが開所し、3年目を迎えることが出来ました。利用者さんが活き活きと働くことが出来る環境づくりを目指して、職員間で意見を交換しながらネクストの体制づくりを行ってきた1年でした。まだまだ課題はたくさんありますが、利用者さんからの「ネクストで働くことが楽しい。」という言葉を糧に、2023年も利用者ひとりひとりを大切にした支援を職員みんなで協力しながら行っていきたいと思います。

※横畠麻実：2022年の漢字＝「働」

●2023年の抱負

ネクストの活動の幅を広げるために、現在、「農福連携」に向けた取り組みを進めています。形にするためには、知識の習得ももちろんですが、さまざまな方からの協力や支援が必要となります。
2023年は地域や人とのつながりを意識し、視野を広げて職員、利用者さんと共にさまざまなことに挑戦していきたいと思っています。職員も利用者さんも楽しく働ける環境づくりを目指して、一歩一歩進んでいきたいです。

生活訓練施設ウイスパー

濱田 さくら

●2022年を振り返って

2022年を振り返ると、職員体制の変更から始まり、プログラムの見直し担当業務の振り分けなど、色々と新しいことがありました。利用者さん本人が望む生活を実現できるように、担当職員がそれぞれの目標の振り返りを丁寧に行い、職員間での情報共有を徹底することで、利用者さんとの関わりはもちろんですが、職員同士の絆も強くすることができました。それぞれの職員が新しさを実感することができた１年だったと感じています。

※濱田さくら：2022年の漢字＝「新」

●2023年の抱負

一つの利用者さんの事例に対して、職員同士がそれぞれの考え方を共有することで、さらなる連携を図りながら、引き出しを豊かにしていくことができます。職員一人一人の視点が増えれば、利用者さんの可能性も無限に広がっていくと思っています。
利用者さんの心の声に耳を傾け、寄り添い、地域での生活を豊かに出来るよう、2023年は、それぞれの職員が、様々な視点から物事を捉えることができるようにしたいと思っています。

一般・特定相談支援事業所ビオス

所長：佐坂 有香

●2022年を振り返って

2022年4月は相談支援スタッフの異動もあり、2022年3月からしばらくはバタバタとしておりました。今では少し落ち着きましたが、日々の慌ただしさは変わらず、スタッフは皆相談支援業務に追われています。そんな相談支援事業所ビオスの1年は、困りごとがあれば部署内で相談し、しんどさも共有しながら、よりよい支援を目指してきました。

※佐坂有香：2022年の漢字＝「福」

●2023年の抱負

2023年は、より多くの利用者さんの支援を通して、私たち自身も利用者さんが持つ力を知り、より発揮できるようなサポートを行っていきたいと考えています。
生活の中にはたくさんの困難もありますが、皆様と一緒に困難と向き合い、ともに悩んでいきたいと思っています。

訪問看護ステーション ビオス

主任：秋山 健太

●2022年を振り返って

法人内外の多くの皆様からお力添えいただいたおかげで訪問看護ステーションビオスは立ち上げから１周年を迎えることができました。さらにはむつみの道をともに歩む、新たな３名の仲間を迎え、『対象者さんを社会の一員として捉え、ストレングスを重視し、地域の中で支え合い、自分らしい生活を実現できること（リカバリー）を目的に支援を行う』という事業所理念を大切にし、地域支援を行ってまいりました。まだまだ未熟で生まれたばかりの事業所ですが、多くの皆さまにご指導いただきながらスタッフ一同、成長していきたいと思います。

※秋山健太：2022年の漢字＝「翔」

●2023年の抱負

対象者が病院から地域へ安心して移り、自分らしく人生を歩むお手伝いができるように多職種チームの強みを活かして、包括的な地域支援を実現していきます。その為にチーム内外への地域リカバリー支援の重要性の発信し、病院と地域の架け橋になれるように尽力して参ります。
むつみの道をともに歩む一事業所として一歩ずつ邁進してまいりますので2023年も変わらぬご指導ご鞭撻を宜しくお願い致します。

レストラン ビオス

薮下 李奈

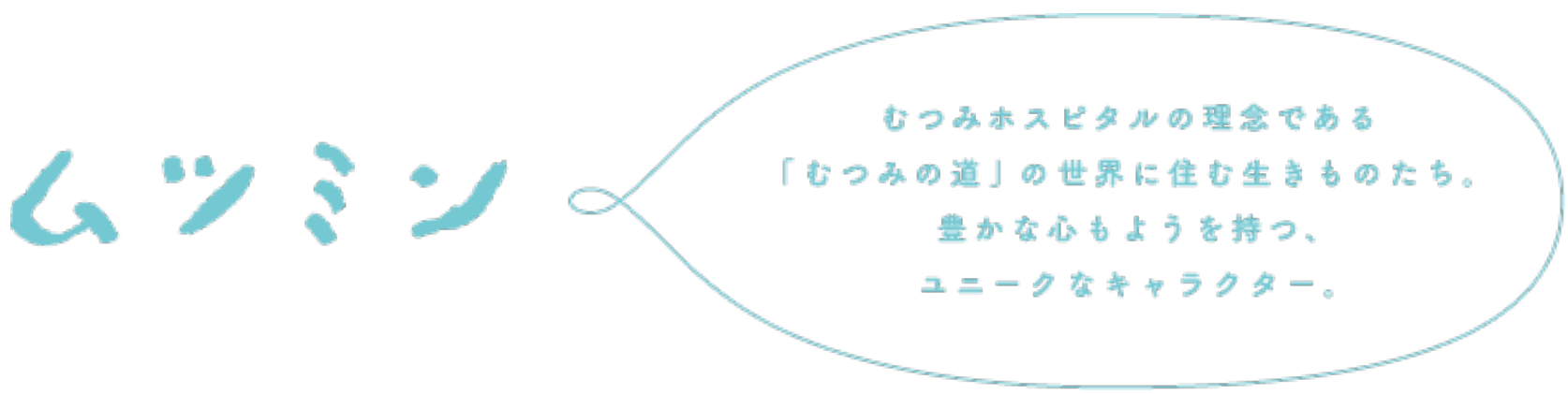
●2022年を振り返って

2022年度は新たなお客様利用率upのため、SNSでの認知を上げること、コロナ禍によるテイクアウト利用率を向上させることを課題としてきました。SNSでレストランを知った方が食事をして、家族にも持って帰りたいとテイクアウトの注文も向上しました。特に男性のお客様の利用が増え、店内が男性オンリーになることもありました。老若男女誰もが健康を意識する時代だからこそ健康＝レストランビオスと繋がる活動をできた一年だと思います。

※薮下李奈：2022年の漢字＝「繋」

●2023年の抱負

レストランの強みは心も体も健康になる食事だと考えています。この強みを活かすには、2022年よりも広報活動を広げる必要があります。お客様から「体が軽くなった」「少し痩せたよ」という嬉しいお声掛けを頂く中で、こういった声があることやなぜレストランビオスの食事を食べると体に良い変化が起きるのか。そういった発信をして食事が生活を変えるという認識を地域や他県の方に広げ、より大きく繋がりを広げていけるよう行動していきます。



MUTSUMI GROUP

MUTSUMI HOSPITAL

HOT LIVING デイケア ほっとリビング

WHISPER 自立訓練事業所ウィスパー

NEXT B型作業所 ネクスト

Restaurant BIOS

医療法人むつみホスピタル広報誌 2023年1月発行　発行／むつみホスピタルグループ

徳島県徳島市南矢三町3丁目11-23 TEL.088-631-0181　FAX.088-631-0186

ゆっくりと、前へ。

一人ひとりの回復への道のりを
私たちもいっしょに進んでいこう。